

## 書評

和田光弘

## 『記録と記憶のアメリカ——モノが語る近世』

(名古屋大学出版会、2016年)

橋川健竜

本書は、現在の日本を代表する初期アメリカ史研究者が、史料論と調査分析の手法に重点を置いて初期アメリカ史研究のあり方に一石を投じる、個性的な論文集である。本文と図版のみで450ページを超え、各章が大きな主題を扱って数多くのトピックを論じている。図版も多く、注記も充実している。以下では各章を紹介し、全体的な論点について掘り下げてみるが、紙幅の都合で内容紹介がやや選択的にならざるを得ないことをご了解いただきたい。

本書は序論にくわえて二部構成である。第6章までが前半で、原史料とデジタル化された史料について、その形態の個性と可能性を論じる。両種類の史料を扱う章もあるが、原史料論とデジタル史料論とに大別できる。第7章以降は記憶論で、16～18世紀の出来事や人物をめぐる記念碑などに発現する公的な記憶は19世紀末以降にどう推移したか、それに誰がどう関係したかを、原史料上の情報からの乖離を含めて検討している。

序章では、これらの多様な分析を一望に収める枠組みを提示している。著者は18・19世紀前半の手稿史料と物品に加えて、事件や人物をめぐる後代に設けられた記念碑なども「モノ史料」と呼び、同じく後代に紙媒体の資料集が刊行され、今日ではさらにデジタル史料が作成されていることを概観している。これらさまざまな種類の史料からは、「モノ史料」の作られた時代に迫る「事実史」も展開できるし、後代の人々の歴史理解が歴史的に立証しうる史実からいかに乖離した形で蓄積していくかを追う、「記憶史」も成りたつという。こうした分析構想を17・18世紀に援用して、この時代の北米が大西洋を通じてヨーロッパ(とアフリカ)とつながった「近世」であるゆえんを示唆することが、著者のもう一つの狙いである。

「モノ史料」を分析する第1章、第2章は、多くの読者の意表をつくだろう。ここで取り上げられるのは、著者自身が収集してきた古銭とエフェメラ(一紙文書)のコレクションなのである。「第1章 近世大西洋世界の中の貨幣」は17・18世紀に植民地で流通した英西仏ほかの硬貨多数の実物を写真で示し、その銘文の分析、各植民地での評価水準の差異の計量的評価、偽造品の出回り方まで、流通の「実相」(18頁)を論じている。加えて、19世紀中ごろまで合衆国では外国硬貨の使用が認められ、また対アジア貿易を意図して特別に銀貨が鑄造されたことを、「近世大西洋世界の遺産」(56頁)であると指摘している。章後半では紙幣の分析に転じ、革命期の大陸紙幣と、地域的な通貨として機能したコネティカット邦の「軍票」に触れて、各種類の大陸紙幣に記されたモットーの紹介から、偽造防止策、軍票の制作過程、大判の用紙からの切り出し方、通番号とテキスト上の日付の関係までが論じられる。現物が著者の関心をどう刺激したか、読者は次々と追体験する。

「第2章 物語るエフェメラ」では18・19世紀の債務証書、差押え証書、受領証、小切手、支払指図書、手形など、文書館に入らず「市井に埋もれてい」(86頁)た「一紙文書」を用いている。各書類の文面から植民地時代、革命期、19世紀前半の人々の経済的なやり取りを次々と点描するほか、各書類のサイズを元に紙の切り出し方を分析している。文面の比較検討から革命後も法律文書としての形式が革命前から継続し、文書の寸法も同時代のイギリスと変わらないことも確認される。(ただし本章で用いられる史料の多くは、時期と発行場所においても、文面や署名に表れる人物においても、相互に独立したものである。)

「第3章 完全なる「植民地ジェントルマン」をめざして」は「モノ史料」単体の分析ではなく、「ジェントルマン」としての規範を内面化しようという植民地時代の上階層の人々の努力を、アレクザンダー・ハミルトン『いにしえの名誉ある火曜倶楽部の歴史』(1754年～56年執筆)とジョージ・ワシントンのマナー規則集を題材に論じる。いずれの史料からも「会話」のあり方がジェンティリティ(上品・洗練の観念)の鍵だったことが示されるが、ジェンティリティの本場がヨーロッパである以上、植民地人によるその追求は「劣等感の表出」(177頁)という側面が強い、と指摘している。

第4章と第5章は、近年急速に編集と公開が進んでいるデジタル史料を用いた分析である。「第4章 ワシントンの帝国」はデジタル史料の「有用性」(190頁)に注意を払って、その検索機能の活用を模索している。著者によれば、デジタル史料は人文科学的な史料通読の手間を大幅に軽減する。実例として、独立革命当時の人々、またジョージ・ワシントンが「帝国(empire)」という言葉をいつ、どの形容詞と連ねて用いたか、『大陸会議議事録』など革命期政治史の主要史料4種類(無料利用できるデジタル版)が検索される。「悉皆調査」(190頁)であるからこそ、「用例がない」(192頁、傍点は原文ママ)ことも証拠立てられると著者は強調する。アメリカを「帝国」とする用例は独立戦争中でなく独立後に目立ち、当時の政治家全体としても「帝国から独立して新たな帝国になるとの野心は、少なくともあからさまな表現としては避けられていた」(206頁)。また『ワシントン手稿集成』デジタル版の検索によれば、ワシントンは1783年にこの語を多く用い、その際には“rising empire”という連語で使う傾向が見られたが、大統領在任中は用いなかった。

著者のデジタル史料とモノ史料への関心が融合しているのが、「第5章 ワシントンの懐中時計」である。著者の所有する18世紀の懐中時計を用いた内部構造の紹介からはじまるこの章の中核は、『ワシントン手稿集成』のデジタル版を用いた、懐中時計に言及のある書簡の検索と紹介である(なお、著者はワシントンを描いた代表的な肖像画にも懐中時計の姿を探しているが、肖像画の図版は収録されていない)。それらの書簡を他の資料集で補っていくと、第一に、ワシントンおよび人々の懐中時計のデザインへのこだわりが頻繁に顔を出す。第二に、盗難を経て第三者の手に渡っていた懐中時計の返還、またワシントンの依頼した懐中時計の購入をめぐる連絡にかこつけて、主要政治家たちがワシントンの大統領着任を期待する旨を伝えていたことがわかるという。著者はモノ史料から工芸史や文化史を超えて政治史に論じ及ぶ可能性を例示し、紙媒体の全集ではモノ史料が索引項目に入らないことが多いので、デジタル史料を用いるのが良いと示唆している。

「第6章 ワシントンの告別演説」は大統領告別演説の日付を検討する小論である。告別演説は『アメリカン・デイリー・アドヴァータータイザー』紙の9月19日(月)号に発表され、演説末尾には17日(土)と記されているが、実はワシントン自身の手稿(著者はファクシ

ミリ版で確認)には、19日が記されていた。著者は稀観書や資料館の手稿史料で告別演説が発表される直前の数日の動きを調査し、日付を17日に変えたのは同紙の発行人クレイプールではないかと仮説を示す。

第7章以降は著者のいう「記憶史」であり、第7章と第8章は南部大西洋岸各地のさまざまな史跡と記念碑を分析する。各章で複数の史跡や記念碑を取り上げて、国家(陸軍省、国立公園局など合衆国政府機関)、顕彰の主導権をとろうと活発に動く「アメリカ革命の娘たち(DAR)」、そして地域的(「ヴァーナキュラー」)な記念団体、がそれぞれに建立した記念碑の位置づけの違いを論じる。記念碑建立という行為の総体的な特質を、俯瞰的に検討しているところが特色だろう。記念碑の写真が多数掲載されていて、著者自身の撮影によるものである。

「第7章 植民地時代の記憶」はロアノークとジェイムズタウンの史跡を取り上げ、ナショナルな記憶と地域的な記念団体の関係を明らかにする。ナショナルな重みでは後塵を拝するロアノークは、イギリス人入植者の娘として新大陸に生まれた最初の一人ヴァージニア・デアを記念して、ナショナルな意義を強調した。ジェイムズタウンでは、合衆国国立公園局はその所有地(史跡公園)に民間団体が記念碑を建立することを認めなかった。後者による碑は近接する私有地に立つ。顕彰の対象も植民地創設でなく、団体ごとの目的に沿った限定的な人物や出来事になる。また20世紀初めに建てられたメモリアル・チャーチは地元の、また遠方の団体による記念プレートで埋め尽くされている。ナショナルな記憶の傘の下には、主導権をめぐる記念団体間の競争があったのである。

南部にある独立戦争の戦場5つに立つ総計53の碑を扱う「第8章 独立革命の記憶」でも、記念という行為の融通無碍ぶりが強調されている。一部の史跡は、国立公園局の判断で国立戦跡公園から国立古戦場に格下げすらされている(ムーアズクリーク、戦闘は1776年2月)。記念団体が名指して記念している人物はしばしば史実が詳らかでなく、「伝統の創造」(370頁)にあたる(女性はこの形で記念されている)。それでも記念碑は独立戦争の帰趨への影響以外の事柄——革命に敵対した忠誠派も含まれる——を記念することによって、戦場の意義を主張し続ける。記念碑は「利用可能な装置」であって記憶は「社会的構築物」である(368頁)、という著者の結論は定説に合致するが、これだけ多数の記念碑を取り上げた実証には、十分な意義があるだろう。

第9章、第10章は個人をめぐる記憶を扱う。「第9章 英雄の血脈」は、「公的死者」という概念——国民国家などにとって「有用」であるため「生かされ続ける」(378頁)死者——を提唱し、実例を複数提示している。ポカホンタスはイギリスにある記念碑も含めて論じられ、「米英の絆を強化し続け」(383頁)るために記念されている。その血縁を主張することをめぐる論争もあるという。この章ではジョージ・ワシントンが死後十数年の間にどう記念されたかも扱われているが、ワシントンの祖先が眠る家族墓所が取り上げられているのが特に興味深い。この墓所に入るワシントン家の直系血族は、ワシントンの体現するナショナルな記憶に接続されてしまう。家系図から考えると、現在の埋葬数で全員ではなく、埋葬される資格のある血族はさらにあると指摘されている。

「第10章 建国のアイコン」ではベッツィー・ロスとポール・リヴィアを取り上げ、原史料からは立証されえない情報が後に付加され、膨らんでいったと論じる。ロスについては、伝説の発端であるロスの孫の主張自体に否定的な見方が一般的であることを確認した上で、

彼女にまつわる伝説が宗教的なシンボリズムの力も借りて一人歩きしていると指摘する。リヴィアについては、リヴィア自身が自分の「早駆け」に触れたがらなかったことから議論を起し、ロングフェローの詩が脚色や史実との食い違いにもかかわらず及ぼしたインパクト（「歴史学の立場からする文学への攻撃は、そもそも意味をなさない」(439頁)）が語られる。さらにリヴィア像の変化が数十年単位で現在まで区分されていて、大衆文化におけるリヴィアの位置づけにも簡潔な言及がある。

本書の手法は、ジョージ・ワシントンをめぐる文物の収集の中で練り上げられてきたものだろう。第9章で短く扱われるワシントン追悼のカメオ（1800年ごろ制作）とメイソン・ウィームズ『ワシントン伝』の古書（1812年刊の第12版）（403, 400頁）、第2章に掲載されているワシントン一家を描いた19世紀中ごろの銅版画（126頁）など、著者はワシントンに関係する文物を広く収集している。その他古銭や一紙文書も含め、コレクション形成の努力に敬意を払いたい（なお、著者はコレクション形成の契機や経緯については論じていない）。これらの史料を並べていけばワシントン・イメージの通史が書けそうだが、著者はそういう選択をせず、多様な史料の活用を訴える史料論に組み替えた。なぜだろうか。

その理由は、外国に拠点を置く研究者がいかん史料にアクセスし、活用するかという問題意識にあるように思える。各地の史跡を訪れて碑文を確認する作業などを別にすれば、本書の調査分析は、私的に収集した原史料コレクションの利用にせよ、無料で利用できるデジタル史料の活用にもせよ、本国の研究者に比べて有形無形に不利な研究環境をどう克服し、史料に基づいて独自の研究をするかという問いへの回答だといえる。個々のエフェメラ（一紙文書）同士の関係が希薄に見えて、奇異の感を抱かせなくもない第2章の分析を、著者は文書館に収蔵されていない、つまり歴史学界では未利用の、史料を「発掘」(p. 86)する試みとして積極的に位置づけている。これが本国の研究者があまり行わない手法だろうことは、疑いを容れない。史跡や博物館、美術館に所蔵されている家屋や家具、食器、衣服、絵画、置時計ではなく、違う種類の史料でマテリアル・カルチャー論を展開していることは、本書の独自性である。そして文化論よりも史料論の性格を打ち出したことによって、本書はアメリカ史研究の外でも読者を得るだろう。

ただし、資料論的な要素が際立つがゆえに気にかかることもある。たとえば第1章は、私蔵のコレクションから語る姿勢と、日本のアメリカ史研究では類例があまりないトピックを扱うことが相俟って強い印象を残すが、次々と繰り出される「貨幣の側面から見」(21頁)の議論が読者を飽和させるようにも感じられる。研究を志す大学院生のためにも、こうしたアプローチや方法が他の研究課題とどう結びつきうるかを、より強調しても良かったのではないか。もちろん、モノ史料を実見するのはよいことである。ただし研究する側は一般に、モノ史料が自分の研究課題に関係する新たな問いや分析視覚を喚起することを期待するだろう。<sup>1)</sup> それに対して本書、特に第一部の論考は、大量のモノ史料から研究課題そのものを新規に立ち上げて、それを分析している。ここには違いがある。だが他の研究課題との接点を示しておけば、他の研究者もモノ史料を実見するのみならず、本書の示

<sup>1)</sup> 一例として、本書刊行後の研究だが、Katherine Smoak, “The Weight of Necessity: Counterfeit Coins in the British Atlantic World, 1760-1800,” *William and Mary Quarterly* 74, no. 3 (July 2017): 467–502.

唆する「近世」概念を組み込んで研究を展開するかもしれない。

デジタル史料の活用を探る章は初期アメリカ研究者には情報の宝庫であり、参考にした。「帝国」への言及頻度の分析(第4章)は、数量的分析に強い著者ならではの多面的なものである。しかし、デジタル史料なら網羅的に語彙を検索できるとして、単一語彙や記事・演説の出現頻度の確認はいつまで研究者の独創性の発露といえるか、評者は気になった。機能や使い勝手は今後も改善されていくだろうが、検索そのものは機械的な作業であり、いつか陳腐化するだろう。<sup>2)</sup> 検索機能が生きてくるのは、やはり独創的な問いや別の作業と連結したときだと思われる。ゆえに、問いや構想力を磨くことの大事さも強調するに値するであろう。この点で第5章は、懐中時計の工芸史も参照したうえでデジタル史料に接続することで、政治の文化史に接近する独自の論点を提出している。読者が第4章の縦横に展開する検索にくわえ、第5章副題のいう学際的な「日常世界復元」にも関心を寄せることを期待したい。

本書後半の記憶論も、設定と切り口の独特さが印象に残る。著者は史跡や著名人をめぐる記憶について、遺産復興運動(コロニアル・リバイバル)期の事例を大量に紹介し、それらがナショナルな内容に統一されているようで、実は記念団体の思惑に基づいた局所利害がひしめいていること、しばしば虚構が後世の評価を支えていること、を十分に明らかにしている。19世紀末期・20世紀前半におけるナショナリズム利用をめぐる団体間のつば競り合いは、それらの時代に興味を抱く研究者には大事な論点といえる。イギリスとフランスが親善外交の形を借りて独立戦争の史跡の記念に参画しているという指摘も、国民国家的な記憶の独占をつい想定する読者には目新しいだろうし、また著者が序論で紹介する「大西洋史」的な側面(9頁)の一端であろう。

他方、本書の記念碑研究が扱うのは、20世紀初めには経験に根ざす記憶がまだ生々しかったはずの南北戦争ではない。もはや関係者が生存しない植民地創設や独立戦争にかんする史跡での、愛国的な関心に基づく記念である。ここに著者が触れていない問題群が残っている。たとえば記憶研究の山場の一つは、記憶史が始まるとき、すなわち出来事ののち半世紀強が経過し、少数の長命な当事者も後の世代が形作る記憶に巻き込まれる局面である。<sup>3)</sup> 第10章を例外として、本書はこの局面を、具体的には19世紀前半を射程に収めていない。

また、20世紀前半の記念に融通無碍な性格が多分に看取されるという本書の指摘はもともとだとしても、それはその場では大きな問題にならなかったとも読めた。本書が目した時代と史跡に限れば、加害の記憶や痛みを伴う記憶は、団体間の主導権争いに影響しなかった。たとえば、南部の戦場の記念碑を多数つき合わせても、また著名人とその直系子孫([公的死者])を多数検討しても、それらの史料は黒人と奴隷制度の問題に沈黙している。著者も短く指摘している(367頁)し、気づく読者も多いだろう。奴隷制度が政治問題化

<sup>2)</sup> 一つの新聞記事がいくつもの他紙に転載されたかに、随所で、しかし機械的に言及している研究として、Nicole Eustace, *1812: War and the Passions of Patriotism* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2012)。さらに発展的な検索の利用法が開拓されていることについて、文学研究の論考だが、秋草俊一郎「『遠読』以降 デジタルヒューマニティーズと文学研究」『UP』532号(2017年2月)、12-19頁。

<sup>3)</sup> Alfred F. Young, *The Shoemaker and the Tea Party: Memory and the American Revolution* (Boston: Beacon Press, 1999), Part II.

していく19世紀前半におけるワシントンの記憶について、本書は比較的手薄であると感じられる。<sup>4)</sup> 植民地時代や革命をめぐる記憶からは、19世紀前半は十分に語れないのだろうか。だとすれば、何を用いてどう扱うのがよいか。著者の見解を伺いたいところである。

本書のもう一つの特色についても触れたい。著者は本書を純然たる工具書として執筆したわけではない。「近世」概念が副題に挙がっているとおり、具体的な史実や歴史の大きな流れについての示唆（「植民地期と革命期を連続して論じる」(1頁)）も意図している。だが著者はこの持続を語る際に、やや控えめな言葉がめだつ。この持続をより具体的に検討するためにも分析するに足るのが、懐中時計の返却や購入・修理をめぐる、ワシントンを初めとする主要政治家の書簡のやりとりではないだろうか。懐中時計の返却は独立戦争後のことだが、返却先は英軍大佐（時計は英軍少佐だった弟のもの）だし、ワシントンはパリに向かうガヴァニア・モリスに自分用の時計の購入を依頼し、時計はパリで購入されて、それを持ち帰ったのは、駐仏全権公使の任を終えて帰国したジェファソンである。こうしたやり取りは大西洋をまたぐ、礼節を踏まえたものであるから、第3章が論じるジェンティリティの問題とも絡み合う。18世紀における洗練の実践と19世紀前半の「民主化」の関係を研究する研究者にも、興味を抱かせるところである。

もちろん、ワシントンはヨーロッパにジェンティリティの究極的源泉を求めるばかりではなかった。彼が大統領就任の際に国産の最高級布地で仕立てた衣装をまとい、アメリカ産の最高の洗練のかたちを打ち出したことはよく知られる。<sup>5)</sup> 「近世」の終わりを何に見るかという問いは、裏返せばアメリカにおける近代を何に見出すかという古典的な問いである。今日ではそこに強いて完全な分断を見る必要はなく、様々な行為の束の中で少しずつ変化が前景化するさまを描くことが許されるはずである。本書が多種多様な分析法と論点を提示して、初期アメリカ研究者の視野を広げてくれたことに感謝しつつ、著者が今後、近世と近代の間のグレーゾーンを、文化史的な手法も用いてワシントンから明らかにする作業を進めてくれることを期待したい。

---

<sup>4)</sup> ワシントンに注目してこの問題に取り組んだ研究として、François Furstenberg, *In the Name of the Father: Washington's Legacy, Slavery, and the Making of a Nation* (New York: Penguin, 2006).

<sup>5)</sup> Michael Zakim, *Ready-Made Democracy: A History of Men's Dress in the American Republic, 1760–1860* (Chicago: University of Chicago Press, 2003), 24–25.